



といふのを聞いて、御膳と肴を一人前づ、下さるといふからお上んなさい、爺、マア有難ふ存じます、何よりの御功德でございませう、其の飯と肴を食へちまつて、爺、御亭主さん、那の方へ一寸お禮を言ひますから、亭、ア、お禮を仰しやい、團平の前へ来て、爺、エ、何所のお方かは存じませんが、どうも有難ふ存じます、見えてビックリ、突、然、團平の胸倉を取つて、爺、ヤ、此の主殺し逃るな、モシ、御亭主、目、明、し、でもお手先でも何でも宜いから呼んで来て下さい、逃すと大變だ、之れア主殺しでございませう、善助、おねわもんだ、汝、おれは若旦那の主水様を引張り出し、脚、岡、で、殺、して、谷、底、へ、打、込、んだ、鬼、の、や、う、な、奴、が、又、と、世、の中、に、あ、る、も、の、か、汝、を、見、付、け、て、敵、を、討、た、ふ、く、と、思、つ、て、居、た、ん、だ、

ろくにやア當らねわ、早くして呉んな……」といつて居る處へ、穢ない衣類を着た老人、其所へ腰を掛けたが息が切れて、セイ、爺、ハ、一、寸、身、体、が、悪、く、つ、て、往、け、ま、せ、ん、二、十、四、文、し、か、目、文、が、な、い、ん、で、す、が、ご、う、か、二、十、四、文、だ、け、何、で、も、宜、う、ご、ざ、い、ま、す、か、ら、食、べ、さ、し、て、頂、き、た、う、ご、ざ、い、ま、す、亭、ア、左、様、で、夫、で、は、煮、染、で、御、飯、を、差、上、げ、ま、せ、う、團、平、酒、を、呑、み、な、が、ら、聞、い、て、居、て、氣、の、毒、に、思、ひ、團、オ、イ、御、亭、主、二、十、四、文、し、か、錢、が、ね、る、か、ら、二、十、四、文、だ、け、呉、れ、ろ、た、ア、可、哀、想、だ、俺、ア、此、ん、な、鬼、の、や、う、な、面、ア、し、て、る、が、情、深、わ、や、可、哀、想、だ、飯、を、一、人、前、に、肴、を、一、人、前、や、つ、て、呉、ん、ね、へ、夫、で、二、十、四、文、は、取、ら、ぬ、へ、や、う、に、し、て、な、亭、へ、エ、之、れ、ア、奴、さ、ん、お、前、さ、ん、は、實、に、剛、い、人、だ、夫、ち、や、さ、う、し、て、お、や、ん、な、さ、い、ご、ん、な、に、功、徳、に、な、る、か、分、り、ま、せ、ん、……モ、シ、お、前、さ、ん、那、所、の、衝、立、の、蔭、に、居、な、さ、る、奴、さ、ん、が、お、前、さ、ん、が、二、十、四、文、し、か、な、い

汝のやうな奴はない。團「ヤイ、そんな事をいふと人が本當にすらア、俺のやうな忠義な者を捉まへて、主殺しとは何の事だ。善「手前は主水様を殺したちやアねわか。團「馬鹿をいへ、主水様を助けたいのは御新造が欺したんだ、宜いか、實はな、主水様手前のいふのは御新造が欺したんだ、宜いか、實はな、主水様は此の一丁ばかり先にお出なさるから、連れてつて合してやる。爺「嘘をいへ、そんな事をいつて此所を逃やうたつて逃すものか。團「イヤ嘘ぢやアねへ、お前も知つてる通り御新造が悪い事をして居て主水様に見付つて、どうしても殺して丁はなけりやアならねむと、若黨の周藏を色仕掛けで欺して、高籠へ入れて、脚ケ岡で殺さうといふのを俺が先廻りをして居て周藏を撲殺し、若旦那の主水様を助けて上戸澤の破端伴藏先生の所へ連れて行き、劍術を仕込んで、今ちやア立派な武士に俺がしたんだ。善「エ、ッ、夫ぢやア御新造が俺を欺したのか。團「欺したんだ。

第十二席

とも、サア若旦那の居る所へ連れて行つて合してやる……御亭主驚いたらう、實は此の人は元一ツ所に奉公をし居てたんだが之れにはいろ、事情と仔細があるんだ、お店のお邪鬼をして皿小鉢を叩ッ毀して済まねへ、勘定は幾らだい……三十五文、ちやア之れだけ置いて行くから……。亭「イエ夫には及びません、モウ龜装が入つて居りましたので。團「イヤさうでねへ。團平二朱の金を置き、團「サア善助行かよ」と善助を連れて井筒屋へ来た、此の所に於て主従對面をいたし、此の善助が國許の一大事を告げるといふお話。

借も善助は團平に連れられて井筒屋へ来た、彦兵衛が彦團平さん、どうなすつた、お連れがあるやうだが。團「イエ之れはね私、主人の所に居た若黨の善助、道中で身体が悪くなつて、今

此の先の飯屋で會たから連れて参りました。送イヤさうですか。團平か、どういたした。團平、善助は私に町で會ひまして……主オ、ナニ、善助に逢た、シテ善助はどうした。團平、善助は私が貴郎を殺したと思つて、私の胸倉を取つて大騒ぎ、段々仔細が分つて善助を連れて参りました。茲に居ります。唐紙を開けて中へ入る善助、尾葉打枯した姿で善オ、若旦那様で、死んだとばかり思つて居たが、お入り思つて居たが、お達者でお在になりました。ワツとばかりに男泣きです、能くお立派で御成人なさいました。面會をいたした、マア泣く泣く主ウム、唯案じられるは國のお父上の事、出ました。モウお驚きなすつちやア往けませんよ、氣を確かにお持ちなすつて……主ウム、唯案じられるは國のお父上の事、兩三日夢見が惡いから國へ歸らうかと思つて居たが、お

父上にお變りはないか。善ハイ、お變りがございませうから私しなされた。善此の三月でございませう。御新造様と尾形清太夫と不義が全たく相分りまして、夫ゆるお父上様が之れを取押へやうといたした時、却つて尾形清太夫の爲めに大旦那様が切殺さるまじうに主エ、ッ、ナニお父上が切られたと善其の揚句に有金を残らず奪ひ、御新造のおゆき様を連れて清太夫が駆落をして、了ひ、私はモウ老人で、寝て居りました。起きて夫れへ出た時分には、モウ旦那様は締切れてお在なさいました、マア夫れから田川様へ届け、御検視があつて、死骸は片付けました。貴郎は送々お家が潰れて了ひました。何とも致しやうがなく、貴郎はモウ死んだ事と私しは思つて居りましたゆゑ、手前が劍術でも使へれば尾形清太夫を見付次第、敵を討ちますけれども、上の手でも、術は使へませんし、夫れゆる所の代官へ訴へて、上の手で



鬼 奴 の 團 平

其跡にて父は尾形清太夫に殺害せられ、即座に敵討を願ひ出す。一條孝心のほごを感じ、松江戸へ上申及び御證文を申下し、孝子の條孝心のほごを感じ、松江戸へ上申及び御證文を申下し、孝子の...

鬼 奴 の 團 平

黄はんと出羽國庄内へ立戻り、叔父の田川庄太夫に面會をし、おゆきの身の事と相談の上、一通り書物を認め、殿様へいたして、夫れから田庄太夫と相談の上、一通り書物を認め、殿様へいたして、の願ひを取上げる遊ばし、翌日家臣を召さる。此旨御評議の上、此...

手當金として彼へお遣はし下さるやう、手前敵の行衛を尋ねるに、は、身は乞食非人になり、千辛萬苦をいたすとも、厭ひはござらん。團平之れを聞いて、團平は「旦那能くも仰しやつた、私しがお供をいたすゆゑ、旅の荷物履ひをしやうと、雲助をしやうと六十餘州、何處でも歩きました、何の金なぞは入りません、金を出して我々敵討の助太刀をいたしたなご、申譯にしやうとは、左傑な事は庄内では流行申さん、主水が團平を眠付けて、主心を得る己れが無駄口を利く、扣へて居れば、人の御親切を知らず、失禮を申し、各々此の者は忠義一徹の者、物の言ひやうも再たれんやう、イザお暇仕つる何れもに別れて、夫より茲を立て、坊三條、越後へ入つた、新海や彌山、後家亡者といふのは、即ち白首の事、三條、越後、又越後の七不思議といふのがある、團三裡と

家老に向つて御禮を申上げ、御禮文を頸に掛け、喜び勇んで御前を退き出た。田川庄太夫に頼み、幕の中は寒さも甚だし、善助は病敷に籠つて、翌寛永十三年主水年、二十五才、出立の日も定まり、假令、尾形清太夫何所に匿れ居るとも、六十餘州の内なれば、東は奥州、寒令、蝦松前、西は九州薩摩、北は越後の浦谷まで、足を限り、州、寒令、蝦松前、西は九州薩摩、北は越後の浦谷まで、足を限り、に尋ね出し、ヤカ仇討た置くべきやと、勇士の一念勇まし、品骨柄、比類なく見わたす、松並木の掛茶屋へ集まつて、主水の志、水主従を取巻き、内出際、松並木の掛茶屋へ集まつて、我等助太刀、た主従を取巻き、内出際、松並木の掛茶屋へ集まつて、我等助太刀、輕少、た主従を取巻き、内出際、松並木の掛茶屋へ集まつて、我等助太刀、主水はござるが、餓別、主持つて幾らかづ、包んだ金を出す、若善助の

の町の大家吉右衛門の吉三郎といふのが之れを見染て  
どうか此のおなみを女房に貰ひたいといふ、此の吉右衛門とい  
ふ親父が誠心で、常々家柄を鼻に掛けて、倅に意見をす  
る吉物には五分といふものがあつて、金満家といはれて、俺だ、そんな  
此の土地で田地畑があつて金満家といはれて、俺だ、そんな  
貧乏の宿屋の娘なんぞを嫁に貰ふなんて、簡達ひだ、止せ」と  
親父はいふけれども、倅は吉三郎は女房の里の工面の悪い方が阿  
父さん宜うございませぬ、女房の里が餘まり工面が良くつて持  
金を持つて来たり、田地畑を付けて来るといふのは、賞めら  
れた話し、ちやアない、田地畑を付けて来るといふのは、賞めら  
口がある、女が金なんぞを持つて嫁に行くなんて、そんな嫁に好  
いのはございませぬ」と種々いふと、吉三郎はお前がいふなら仕  
方がないから貰つてやつても宜い、俺は苗字帯刀御免だから、  
實は宿屋の娘なんぞは忌なんだ、ソコで媒妁人は絹商人で、權右

いひ、狸が百姓に化て農業をして居たといふ、又八ッ房の梅、  
逆竹、三度栗、草鳥頭の油、火の井、浪題目、之れ等を七不思議  
といふ、中々良い國で、再たび村上へ来て内藤家の馬場三郎右  
衛門に會つて、父の殺された話しをして、拙者も心掛けて上げるとい  
ふから三郎右衛門も氣の毒に思ひ、拙者も心掛けて上げるとい  
ふので一緒に此の近所を尋ねたが更に手掛かりがございませぬ  
、ソコで一處を何日まで尋ねても仕方がないからといふので  
上手な易占者に見て貰ふと、南の方へ出なさいといふ、新海が丁  
度夫に當る、此の新海といふのは享保の八年からいふので、其  
前は新海といはれない、船江津といつたのださうで、日に歩み  
夜に泊つて入江町の三日目の新田屋辰藏といふ旅籠屋へ泊り込  
んだ、茲で又二三日逗留をして、那方を見たら、矢張り手掛り  
がない、スルと此の家へ一ツの騒動が出来た、といふのは此の  
家の娘のおなみといふのが新海小町といふ位な美人、處が一



衛門といふのが聞へ入つて、段々新田屋へ話しをする、悪い  
事といふものは知れ易いから、モウ辰蔵が聞いて居て、辰蔵  
吉三郎さんは私の娘を嫁に貰ひたいといふのださうだが、親父  
の吉右衛門といふのが氣に喰ねへ、俺の方は貧乏旅籠屋、先方  
は立派な大盡だ、そんな所へ娘をやつたつて娘の巾が利かねへ  
何といつても俺がやらねへ、吉三郎は鬱いで了つて、情けな  
かない男だからやらねへ、吉三郎は鬱いで了つて、情けな  
だと思つて居る、同じ白根に平田の源兵衛といふ博奕打がある  
之れが悪い奴で、吉三郎を旦那と云つて持上りやア何處へ  
行くにも此奴が放れぬ、誠に其頃は政治が届かないで、悪い  
事を仕放題、或夕方白根の町へ参りますと向ふから吉三郎がや  
つて来る、源兵衛此奴を見て、源若旦那、吉三郎がや  
んかい、何處へ源兵衛此奴を見て、源若旦那、吉三郎がや  
吉三郎、ア、さうかい、源如何でございます、一ばい頂戴したいと

思ひますが、吉三郎、ア、御馳走しやう、何處が宜いだらう、ア、  
さう、梅川樓が此頃普請が出来て、奇麗になつたといふから梅  
川樓へ行かふ、源若旦那は宜い譯で、深澤の大盡が金主をして居  
るから、料理も佳し、家も宜し、結構でございます、源兵衛梅  
川樓へ尾いて来た、亭入つしやい、梅の間へお通し申して  
「梅川樓で梅の間といへば一番宜い處だ、夫から半會席で先  
づ食べて、吉三郎幾らか祝儀をやつた、源若旦那、何だか此頃  
は心配さうな顔をして考へて在つしやいますか、何か心配な  
事でもお在なさいませうか、吉ウム、どうも困つた事が出来た、  
源へエー、何が困りましたか、吉どうも物事は思ふやうに行かない  
もので、源何が思ふやうに行かないんで、私へお話しなさい  
エ、どういふ譯で、お前さんは金があつて、地面があつて、家  
屋敷があつて、苗字帯刀御免だ、家柄が宜い、何が不足なんで  
す、那れだけの家の一人息子ぢやアございませんか、不足なん

例の旅籠屋新田屋へ来て源辰藏さん居るかい男之れア親分  
お出なせね、思な奴が来たと思つたが源少しばかり話があつ  
て来た親分何ぞ御用で源他ぢやアねへ、辰藏さんおなみさんを  
イヤ親分何ぞ御用で源他ぢやアねへ、辰藏さんおなみさんを  
菅野の家へ、俺が口を利くから、何かお前に氣に障る事があつ  
たとか何とかいふが、そんな事は水に流して、俺の頼みだ、源  
兵衛の顔を立つてやつて呉んねへ、辰藏さん親分有難ふございま  
す、ナニ方角が悪い、夫です、源ナニ方角が悪い、ウム  
で、他何にも悪くない、サカサハありませ、源ナニ方角が悪い、ウム  
今年方角が悪くない、サカサハありませ、源ナニ方角が悪い、ウム  
い、どうだ、先づ俺に任して置いて來年やつて呉んね、辰  
エ、何でも二三年方角が塞がり、源アそんな事をいはね、  
で、俺に任して、宜いか萬事頼むせ、源アそんな事をいはね、  
つた、辰藏は、どうして、野の家へやるのが氣に入らない、此

ざやアある譯がねへや、私も毎度、貴郎の御厄介になつて、  
博奕の資本を貸して下さる、着物一枚も引張ってお呉んなさる、  
、何かお禮をしやうと思つてるんで、何かお話しなさい、吉  
、イヤ實は新潟の宿屋で、新田屋といふのが、大層美しい女でございま  
す、女房に貰ひたいのだ、源成程、それは大層美しい女でございま  
ら、といつてどうしても呉れない、俺は是非共、それを女房にした  
いのだ、源何です、譯のね、話ぢやアございませ、か、そんな  
馬鹿な話があるもんです、吉さうかい、此の話が纏まればお前に  
嫁に貰つて上げませう、源イニお金には及びませ、  
私に三十兩の禮金をするから、源イニお金には及びませ、  
不斷お世話になつて居るんだから、源イニお金には及びませ、  
馳走になつて別れた、翌日子分を一人供に連れて平田の源兵衛

の縁談をば親父が毀して丁つて、同じ白根でもつて大家といは  
れて居る菅野と互角の近藤重右衛門の粹重吉の許へ娘おなみを  
嫁入らせると、之れが意根の原因となつて茲に一ツの大騒動出  
をいたし、嗣からす主水主従の身の上は大難を惹起す、末に江戸  
築地に於て仇討本懐を遂げるといふ一條は後編として「金剛  
太郎」を以て言上致しますれば何卒引續き御愛讀のほどを願ひ  
上げます。

鬼奴の團平終

明治四十三年九月五日印刷  
明治四十三年九月十八日發行

鬼奴の團平

講演者 一 立齋文車

發行者 松本善吉

印刷者 山田元吉

大阪市南區鹽町三丁目二十七番地  
大阪市南區安堂寺橋通二丁目二十六番地

不許複製

大阪市南區心齋橋通安堂寺町南へ入

大阪市南區八幡筋西横堀木綿屋橋詰

賣捌元 田中榮堂  
賣捌元 三宅同盟館

新講談續刊目次

桃川如燕 講演

水吞村九助

桃川如燕 講演

後の水吞村九助

一龍齋貞山 講演

無敵流 劍士 後藤半四郎

玉田玉秀齋 講演

豪傑 秋山要助

玉田玉秀齋 講演

大善寺 山仇討 雷角齋入道

松本金華堂發行

新講談續刊目次

桃川燕玉 講演

元祿 豪傑

伊庭如水軒

桃川燕玉 講演

元祿 勇婦

伊庭お糸

玉田玉秀齋 講演

八重垣主水輝秀

玉田玉秀齋 講演

勇婦

八重垣お菊

玉田玉秀齋 講演

姫路 騷動

小寺家大評定

新講談續刊目次

一立齋文車 講演

忠勇

鬼奴の團平

一立齋文車 講演

怪力

金剛太郎

玉田玉秀齋 講演

眞田家 三勇士

猿飛佐助

玉田玉秀齋 講演

眞田家 三勇士

由利鎌之助

玉田玉秀齋 講演

眞田家 三勇士

霧隠才藏

松本金華堂發行

松本金華堂發行

新講談續刊目次

柳亭燕枝繼演

千人塚の由來

柳亭燕枝講演

高岡左次馬

玉田玉秀齋講演

俠客 業平文治

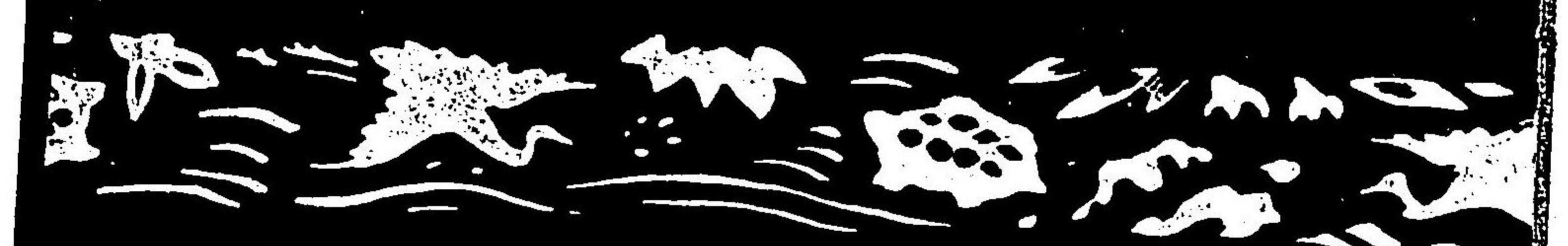
玉田玉秀齋講演

俠客 後の業平文治

玉田玉秀齋講演

豪勇無双 郷の虎丸

松本金華堂發行



松本

重華堂

發行

